

町衆の衰退

町衆衰退の経緯を統計数字から見よう。

まず、人口である。1955 年から 2010 年までの約半世紀に京都市全体では漸増している。しかし、それは市内周辺部での増加に支えられたもので、中心部では激減しているのである。下表で中心

京都の人口の推移（国勢調査）					万人
年	京都市	下京区	中京区	伏見区	右京・西京区
1955	120.4	14.6	16.7	11.8	11.9
1960	128.5	14.6	16.4	13.5	15.7
1965	136.5	13.6	15	16.3	19.3
1970	141.9	11.6	13	19.1	25
1975	146.1	10	11.5	23	27.8
1980	147.3	8.7	10.6	25.7	30.2
1985	147.9	7.9	10	27.4	32.5
1990	146.1	7.3	9.5	28	33.8
1995	146.3	7.1	9.1	28.6	34.9
2000	146.7	7.1	9.5	28.8	35.2
2005	147.5	7.5	10.2	28.5	35.7
2010	147.4	7.9	10.5	28.4	35.6

右京・西京区＝ 1975年まで右京区、1980年から分区の西京区を合算

部の代表に下京区と中京区を選んだ。同期間に両区の人口はほぼ半減している。一方、周辺部の代表に選んだ伏見区と右京・西京区ではほぼ 3 倍増している。

次に伝統産業の推移を見てみよう。京都の伝統産業は和装文化の周辺に裾野をひいているが、その中心にあるのは西陣織で知られる織物業であり、友禅染で知られる染物業である。これを繊維品という項目でくくって事業所数の推移で示すと卸売業では最近 20 年弱の間に 4 分の 1 に激

京都市の繊維小売・卸事業所数の推移

年	繊維・衣服・身回品小売業	繊維品卸売業
1975	3886	1695
1981	4372	2084
1986	4228	1928
1991	4116	1698
1996	3747	1269
2001	3307	762
2006	3020	537

「京都市の事業所・企業」京都市総合企画局

減している。京都の繊維問屋街として知られ全国に販路持っていた室町筋が、バブル景気崩壊後火の消えたように衰退してしまった実態がこの数字に如実に示されている。室町通は平安時代からつづく京都の商業の中心であり、中京・下京を貫いて南北に通じ、山鉾町を多く擁して、その経済力で祇園祭山鉾行事を底辺から支えてきた。

それがこのように衰退した最大の要因は日本人の生活の変化である。

日本の民族衣装である和服は、いまでは冠婚葬祭時の衣装となった。男女ともに和装は一生のうちに二度か三度というのが平均的日本人の生活である。今どき和服を普段着に用いるのは舞踊家や茶道家、伝統演劇人、僧侶や神職など特定の職業についている人だけだろう。

和装衰退の指標として西陣織の生産高推移を見よう。1993 年はすでに平成に入ってをり和装はほぼ普段着の役割を終えていたと考えられるが、その時点と比較してすら 16 年後の 2009 年に着尺出荷額は 91 億円から 16% の 15 億円に、帯出荷額は 1395 億円からわずか 11% の 161 億円になっている。まさに壊滅状態である。

京都市・西陣織物生産状況

出荷額＝100万円

年	事業所数	在籍従業者数	着尺出荷額	帯出荷額
1993	243	5895	9051	139510
1994	240	7033	9052	131039
1995	234	6406	8628	117031
1996	232	6259	7676	113406
1997	229	5793	7846	97991
1998	222	4280	6738	74346
1999	210	3809	6975	67594
2000	199	3327	6563	61599
2001	180	2806	5365	51724
2002	179	2573	3636	40671
2003	166	2302	3145	33748
2004	164	2144	2883	32002
2005	163	1913	2599	29665
2006	162	1890	2430	25744
2007	158	1795	2055	21944
2008	158	1433	1604	17998
2009	156	1281	1463	16126

「京都市主要統計」

生産減少の反映で西陣織の従業者数は5700人減と8割余減ったにもかかわらず、事業所数が4割減の64%であることにも注目したい。代々受け継いできた家業を簡単に閉じるわけにもいかず、従業員は辞めてもらっても家長は細々と事業を継続している。とはいえ、次世代に継続することはありえない。蠟燭が燃え尽きれば消え行く定めの現状である。

和装文化の広い裾野には、針、絲、生地、紐、帯止めや簪などの装身具、足袋、履物、袋物、扇子、手拭、その他関連品の専門商が軒を並べていたが、着尺や帯の生産が衰退するのと軌を一にして退場を余儀なくされた。友禅染にしても、染工場の周辺には型紙屋、糊屋、染料屋、蒸し屋、湯伸し屋、整理屋、染み落し屋、紋糊屋など一連の工程の分業に携わる材料商と職人群が犇っていたが、一蓮托生で退場していった。当然、悉皆屋、仕立て屋も消えた。

和装文化の消滅が京都経済に及ぼした影響ははかりしれない。祇園祭山鉾行事を支えてきた町衆を支える経済基盤は一変したのである。これが下京・中京の人口減少の大きな要因になったことも容易に理解されるだろう。